

## 天人女房（新休）

昔、広瀬川上流の新休というところに七尋淵ちゅう川があった。

ある日、みぞうか天女さんたちが舞い下りて来て水遊びバしよらしたちゅうもん。

天女たちは、脱いだ羽衣は川ン端ン松の木ン枝にひっ掛けて、泳ぎに夢中になっとらしたちゅうじゃっかい。

丁度そけえ通り掛かった近くの若者が、初めて見る光景に「こぎゃん奇麗えか着物な見た事もなか、どりゃいっちょあたこっして、びっくりさしゅうかい」ち思うて一番奇麗えかっぱ草原や隠いて、様子ば見とったちゅうた。



いっ時したりや、天女たちはそれぞれ羽衣ば着て、天さね舞い上がってしまったわしたちゅうた。

ところが、一番別嬪の天女さんな自分の羽衣ン無かもんじゃって、一人そけえうっ座って、泣き出さしたちゅうじゃっきやあ。

若者な気の毒うなって「どぎゃんしなしたかあ」ちゅうて訳ば尋ンねてみたりや「私は天から舞い下りた天女です。着物がなければ天に帰る事が出来ないので」ち言うて、またえっとばかり太か声じゃあて泣き出さすもんじゃって、若者なみぞげしなって〈出してやりもそうかにかあ〉ち思うたばってんか、あんまり天女さんが別嬪じゃらすもんじゃって、わざと知らんふうりして様子ば見とらいたちゅうたい。

天女さんなしよんなかもんじゃって、泣き泣き若者ンの家さん、ちいて行かしたちゅうたい。

若者ンの家にかや犬ば一匹飼うとらいたちゅうとん、そん犬が、寝っ時でん、天女さんの側から離れんごてして、あんまり懐くもんじゃって、天女さんもひどうみぞがりよらしたちゅうじゃっきや。

天女さんな、娑婆にも住み馴れ、二人はとうとう結ばれて毎日幸せに暮らしとらしたちゅうもん。

そうこうしとる内、三年経ったけん、もう着物ば出してやったちゅうア天さね戻ったりやさすみやあち思うて出してやらいたちゅうたい。

ところが、天女さんな、嬉っしゃ、着物ば着てみよらしたちゅうとん、

そんまゝ天さね、昇ってはってかしたちゅうもん。

若者な女房が恋しくて、恋しくて〈どがんなとして天さね行たて、女房に会いたい〉ち思うて、夜も眠らんごて案じてばかりおらいたもんじゃって、つらも青垂れて半病人のごてなとらいたちゅうもん。

ある日、あんまり若者がしょげこくつとるもんじゃってみぞげに思うた東向寺んご前様が「今日ん内い、庭の真ん中に糸瓜の種バ蒔いて、回りに百足の草履バ埋めておくがよか。そうすればあんたの望みが叶えられるじゃろう」ち言わすとちゅうもん。

そりば聞いた若者なそりからじき草履ば作り始めたばってん、九十九足しきや作らん内ィ、日の暮れてしもうたちゅうたア。

「どい、出来たしこた。しよんなかもね」ちゆて、糸瓜の回りに埋めらいたちゅうもん。

あくる朝、目ン覚めてみてうっ魂消えたのなんの、まこて糸瓜や一晚の内い伸びれば伸びるもん、天まで届いとったちゅうわい。

若者な喜こうで、じきい登り出さいたりや犬も後からちいて来とちゅうもん、ところが天まであと一歩ちゅうところで糸瓜ンつるが届かでにゃおとちゅうたい。

〈こりゃ困ったね、どぎゃんしたもねろ〉思案しとらいたりや、犬が若者の肩から天まで跳上がって尻尾ばすうちゆて差し出したもんじゃって、それえ掴まって天さね上らしたちゅうた。

再会できて二人は嬉っしゃいつまっでん抱き合うとらしたちゅうわい。

そん天女さんが実は七夕さまで、若者が犬飼さんにならしたちゅうお話じゃっかい。



こっでしみゃ